

在伯日本人の異文化適応過程に関する探索的検討 —文化受容と不適応症状及び 適応促進要因を中心に—

迫 こゆり

I はじめに

1. 海外在留邦人の動向

日本外務省領事局政策課の海外在留邦人数調査統計、平成24年度速報版によると海外に住む日本人総数は緩やかではあるものの依然上向きであり、その数は平成23年10月1日現在の推計で1,182,557人となっている。これは滞在日数が3カ月以上で在留届を外務省に提出した日本人と、日本国籍を保有して海外に永住している日本人の総数である。国別の内訳は、多い順にアメリカ、中国、オーストラリア、英国、カナダ、ブラジル（伯刺西爾）と続いている。永住者数は399,907人で、全在留邦人数の33.8%にあたる。しかしこの割合は国別で見ると大きく異なる。ブラジルの場合、在留邦人数56,767人のうち永住者は54,578人。つまり96.1%が永住者で、その他長期滞在者はわずか3.9%（2,189人）である。これは100年以上前に始まった日本人移民の歴史がその背景にある。ブラジル日本移民百年史（2008）によると、戦前に約19万人、戦後約6万人の日本人がブラジルに渡っており、その多くが日本国籍を保有したまま居住している。現在ブラジルの在留邦人数が減少傾向にあるが、それは移民した日本人たちの高齢化による逝去のためと思われる。しかしブラジルには依然として世界一大きい日系人社会が存在し、日本人移民の子孫である日系ブラジル人の総数は推定約140万人にのぼる。

2. Z市について

今回調査を行ったブラジル南部最大の都市であるZ市は、国内では移民の街としても知られており、日系のほかドイツ、イタリア、ポーランド、ウクライナなどヨーロッパ系移民の子孫も多く住んでいる。人口175万人のうち、日系人は約4万5千人居住しており（総領事館ほっとライン、2006）ブラジル国内ではサンパウロ市に次いで二番目に多い。Z市の在留邦人の数は永住者3,762人、長期滞在者が125人である（外務省領事局政策課、2012）。日系人の三大祭り（花祭り、移民祭り、春祭り）はZ市の歳時記に入っており、日本人らしき人も街中で見かけるが、そのほとんどは日本人移民の子孫で、ブラジル生まれの日本語を理解しない日系ブラジル人である。

II 問題

1. 異文化適応と異文化不適応

適応とは「個人と環境のあいだに調和のある満足すべき環境が保たれている状態と言える。」（訥摩、1981）異文化への適応については高井（1989）が「ある個人が自分の生まれ育った社会環境か

ら離れて、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程」と述べている。またAdlerが定義した5つの異文化適応段階（phase）の最終段階“自立（Independence）”段階が適応に至った状態と理解すると、異文化適応とは「社会的、心理的及び文化的相違を受け入れ、生活を楽しむことが出来る。自らの行動を選択し、責任を果たせる。個々の異文化での存在の意義を見出すことが出来る。」（Adler, 1975）などの状態と言えよう。

では「不適応」とはどんな状態のことを言うのだろうか。「不適応」とは適応行動がうまくいかず、心身に好ましくない状態を招いている時と詫摩（1981）は説明している。異文化の不適応については田中（2005）が先行研究において「人間は自文化に規定された面をもつ存在で、それゆえに異文化接触が混乱と葛藤をもたらし、ストレスを発生させると解釈される」と述べている。この混乱と葛藤の状態が、異文化にうまく適応できない不適応の状態と思われる。Nobuko & Masashi（2007）は、乳幼児を持つニューヨーク在住の日本人母親の異文化ストレス、育児ストレスと精神健康度の調査研究を行っている。そしてNYに住む日本人の母親の精神健康度が日本国内の女性より低かったと述べ、（日本の）家族と遠く離れているなかでの子育てや教育は、不安や負担をより強く感じる事が主な原因だと結論づけている。つまり異文化接触で起きる不適応状態がストレスを発生させ、自分の家族などに頼ることが出来ない状態がより精神健康度を低下させていると考えられる。

2. アイデンティティの保持

竹下（2001）は台湾における日本人妻の社会的ネットワーク研究において、日本人妻たちは台湾に移住する以前に形成された日本での社会的ネットワークを維持しつつ、台湾において新たに日本人とのネットワークを形成することによって日本人としてのアイデンティティを保持していると述べている。また高宮ら（2006）は多文化間心身医学研究において、他国に滞在中に摂食障害を発症した3事例をあげ、多文化との接触により自身のアイデンティティが揺さぶられ自信がなくなったことが発症のきっかけであり、その治療には日本人としてのアイデンティティの回復と自身の価値の回復が必要で、文化的背景を考慮する必要があったと報告している。

日本人としてのアイデンティティの保持は異文化に適応する上で重要なポイントである。異文化適応研究における「アイデンティティ」は「民族的アイデンティティ」、「文化アイデンティティ」また「社会的アイデンティティ」が同じような意味で使われていたり、それらのアイデンティティが人間存在の全体であるかのように論じられていたりすることがある。したがって本研究でアイデンティティという言葉を使用するにあたり、あらかじめ整理をしておきたい。原（1995）はアイデンティティという言葉はSelf (Ego) Identity、Social Identity、Existential Identity、Biological Identityと、少なくとも4つの意味合いで使い分けられているという全体像を捉えたうえで、前出の民族的、文化的の他に国民的、宗教的、言語的アイデンティティなどはすべて社会的な帰属意識や所属の明確性や安定性を指す社会的アイデンティティ（Social Identity）に含まれるとしている。そして「異文化接触によるアイデンティティに関連する現象などは一見、国民的、民族的、文化的

な存在、対象への帰属意識や一体感、すなわち社会的アイデンティティとしての問題であるように見える。しかし実際にはそれらは同時に自己（自我）アイデンティティ（Self (Ego) Identity）の確立、混乱、危機の問題でもある。」（原、1995）と述べている。したがって本研究では、特に指定のない場合「アイデンティティ」とはすべてのアイデンティティを集約する意味合いで自己アイデンティティを指すこととする。Erikson（1973）はアイデンティティを、生涯を通じた心理・社会的な発達としてとらえ、それは時間の軸と空間の軸の交差によって位置づけられる。つまり発達のプロセスという“時間的な広がり”と自己が関与する世界という“空間的な広がり”によってアイデンティティは生涯発達していくものととらえた。異国に住むということはこれまでの自分の価値観、常識や言語的コミュニケーションなどが滞在先の国では通じないという場面に直面し、あらゆる状況で不便や困難を感じるとともに、自己有用感や肯定感が著しく損なわれる可能性がある。これは“日本の空間”の中で発達してきたアイデンティティが“別の空間”に移動したことにより、なにがしかの方向転換を余儀なくされて混乱が起きている状態と考えられる。

3. 先行研究と本研究の位置づけ

日本人による異文化適応に関する先行研究は、日本在住の外国人対象または帰国予定のある在外邦人対象のものが殆どである。わずかに永住目的の在外邦人を対象にした質問紙による研究はあるが、聞き取り調査を行ったものは見当たらない。特に異文化適応のプロセスに関する国内の研究は在日外国人対象の研究が多く、在外邦人の異文化適応プロセスの先行研究はなされていない。また海外の研究で日系人や諸外国からの移民のメンタルヘルス研究は質問紙による適応状況と不適応要因および解決方策探究のものがほとんどであった。本研究は1.在外邦人の異文化適応プロセス 2.聞き取り調査法で研究 という2つの新たな観点により検討を行う。聞き取り調査を行うことで質問紙法では得られないより詳細な内容を分析することが可能になるとと思われる。李・田中（2011）は、外国人研究者による海外移民研究における文化変容（異文化適応）を巡るの研究について、集団レベルでの変化と個人レベルでの変化の両方が研究上の視座として想定されていると指摘した。そして心理学領域で焦点が当てられる個人レベルでは、さまざまな心理的反応の測定が試みられてきたと述べている。本研究では個人レベルの異文化適応のプロセスに焦点を当てて研究を進めるが、外国人研究者による日本人以外の人種の異文化適応研究で得られた知見がブラジルに移住した日本人にも当てはまるかどうかについても検討する。また今回は日系コミュニティの影響も合わせて検討するため集団レベルの変化の一端にも触れることになると思われる。

海外在留邦人数が増加の一途にある現在、鈴木（2012）は異国でこころを病んだ日本人が迅速かつ的確な対応を受けられないでいる事例を示し「海外は日本人の大多数にとって広大な精神科医療過疎地」であり、「在外邦人の精神保健対策には国境と文化をまたぐ広域地域精神科医療圏における予防医学的戦略が求められる」と述べている。異文化適応プロセスの探求は在外邦人が海外生活を送るなかで予想される精神的葛藤に関する知識を持ちその予防と安定的な適応のために行うだけ

ではなく、広く在外邦人の精神保健医療の発展を画策するためにも有用な研究であると思われる。今回自殺念慮やうつ状態などの症状をもたらした事例を検討し臨床心理学的見地に立って研究することによって、在外邦人に対しての心理的援助の必要性にも光を当てることになると考えられる。

Z市は外国といえども日本文化をいたるところで感じることができる街である。地球の真裏に位置する日本から最も遠い国であるが、日系人の多いこの街に住む日本人は、日本人や日系人の少ない街に住む日本人と比べて異文化接触によるストレスを受けにくいかもしれなし、日系人が多いことが却って異文化の受け入れを阻む要因の一つになるかもしれない。ブラジルの特徴である日系コミュニティ、日系人が渡伯した日本人の異文化適応に与える影響に着目することで在伯邦人の適応プロセスの特殊性が表れてくると考える。

河合（1999）は、フィリピンとシンガポールで日本人の子どもたちの異文化適応研究を行っているが、そのなかで文化の問題についての考察の必要性を唱えている。彼は、ユングがヨーロッパ人の無意識界にある男性原理の有意性を補うものとして底層に存在する女性原理の流れを見出したのを受けて、日本と西洋文化を対比し父性原理と母性原理の差に注目した。さらに日本と西洋の文化差の判断軸として「父性―母性という軸と、内向―外向という軸の二つによって整理するのが便利である。」と述べている。日本人の意識とその特性がブラジルの文化に出会ったときに、どのような形で表れるのか、その現象についても考察する。

今回の調査協力者の中には滞在年数が数十年と長い方が多く、人によっては50年以上前の記憶を想起してもらったことになった。やまだ（2000）が「想起は『過去』をそのままの形で引き出すというわけではない。時間的に後から来るものによって、『過去』は『現在』と照合されて絶えず再編成され、読みかえられて変容していく。」と述べている。語られる内容は聞き手にその体験がどのような意味を持っていたかを伝えたくて語られたことであり本人にとって重要な意味を持つ内容であることに変わりがない。“いま、このように語る”意味を検討しつつ分析を進めていくことにする。

III 目的

1. 渡伯後から現在までの在伯期間のなかで、いつ、どのような時に異文化不適応感を持ち、どのように異文化を受け入れて適応に至ったか。そのプロセスを検討し、理論を生成する。
2. 日系コミュニティや日系人の存在は、渡伯した日本人の異文化適応の過程に影響を与えたかどうかを検討する。

IV 方法

1. 調査協力者：永住目的でブラジル（Z市）に住む日本人21人。この時の日本人とは、日本で生まれて日本人の両親に育てられた者と定義する。調査後に永住目的の滞在ではないと分かったなど条件を満たさない者を除外し、最終的に男性6名、女性12名、合計18名を分析対象とした。在伯年数は10年未満が6名、20年～49年7名、50年以上5名である。表や文中は、在伯年数10年未満の方を◆、20年～49年は◇、50年以上は◎と表記し、調査協力者はそれぞれA～Pまでのアルファベッ

トをつけて識別した。在伯50年以上の調査協力者は1908年から始まった農業就労を目的とする移民とその配偶者。在伯20～49年の調査協力者は1961年に制度化された工業技術指導を目的とする移民とその配偶者が主である（ブラジル日本移民史料館、2008）。10年未満の男性1名は就労目的、女性5名は国際結婚による移住だった。渡伯した時の年齢は16名が20代、30代の成人期。2名が7歳、11歳の学童期であった。

調査前には、調査協力者の方々に筆者の在学証明書を提示し本研究の趣旨説明を行って同意書に署名していただいた。面接中はあらかじめ承諾を得て会話を録音し、その後逐語録を作成して分析データとした。

表1. 調査協力者の属性及び渡航理由

分類	性別	年代	渡伯時期	渡伯時年齢	在伯年数	渡伯の理由	
◆	A	女	30代	2009年	32歳	2年	国際結婚
	B	女	20代	2008年	20代	3年	国際結婚 息子が1歳になったから
	C	女	40代	2007年	30代	4年	国際結婚 長男の就学に合わせて
	D	女	30代	2006年	20～30代	4年	国際結婚
	E	女	30代	2003年	20代	7年	国際結婚 長女の就学に合わせて
	L	男	30代	2003年	23歳	8年	ブラジルで仕事がしたい
◇	F	女	50代	1983年	26歳	28年	国際結婚
	G	女	50代	1981年	25歳	29年	結婚、夫の仕事に伴って 海外に住みたい
	H	女	40代	1981年	21歳	30年	高校卒業を機会に 家族で移住
	I	女	60代	1969年	20代	42年	国際結婚
	R	女	60代	1991年	30代	20年	結婚、夫の仕事に伴って
	M	男	50代	1982年	28歳	29年	ブラジルで仕事がしたい
	N	男	60代	1981年	31歳	29年	ブラジルで仕事がしたい
◎	J	女	80代	1960年	28歳	51年	ブラジルに移民したい サンバが好き
	K	女	70代	1959年	22歳	52年	花嫁移民 家を出たい
	Q	男	60代	1957年	11歳	53年	両親の移民に伴って 11歳で移住
	O	男	80代	1960年	30歳	51年	ブラジルに移民したい 農業をしたい
	P	男	90代	1925年	7歳	86年	両親の移民に伴って、7歳で移住

2. 調査時期：2010年10月から2011年4月。

3. 面接方法：半構造化面接。所要時間は約一時間。ほぼ日本語で面接を行った。

質問内容：主に下記について質問した。

- (1) 渡伯から現在に至るまでの人生について。ライフイベント（渡伯、結婚、子育て就職、引越しや転職、その他）の状況下で
- i) 精神的に参ってしまった、神経過敏になったような時期はありましたか。
 - ii) なぜそうなったと思いますか。
 - iii) どのように対処しましたか。

(2) 選べるとしたらどちらの国に住みたいですか。その理由はなんですか。

(3) ブラジルの良いところ・日本の良いところを具体的に教えてください。

場 所：カフェテリア・調査協力者の自宅・職場など。調査協力者が指定する場所で行った。

フェースシート：年齢・性別・渡伯の時期・きっかけ・家族構成・家庭で使用する言語・家庭で食べる食事・(既婚者は)配偶者の国籍など。

4. 研究手法：研究1についてはグラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて検討する。木下 (2007) によると、M-GTAは社会的相互作用に関係し「人間の行動の予測と説明に関するものであって、同時に研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定された範囲内における説明力にすぐれた理論」である。そして「研究対象としている現象がプロセス的な特性をもっている場合」に適していると述べている。本研究は異文化適応へのプロセス研究を目的としており、認識や感情の動きのプロセスを対象とすることができるこの手法がふさわしいと考えた。

M-GTAでは事前に設定した分析テーマと分析焦点者に照らしてデータの関連箇所をヴァリエーション (具体例) として抽出していき、他の類似例も説明できる概念を生成する。この際にデータをバラバラに切片化するのではなく、文脈を生かしたプロセス性のある部分に注目していく。概念を生成する際には分析ワークシートを生成し、概念、定義、具体例、理論的メモを記入する。そして一つの概念に対して具体例を増やしていくとともに、生成された概念の対極例に注意しながらデータを読み込んでいく。そうすることで解釈や概念の生成が憑依的になる危険を防ぐ。具体例が豊富に出て来なければ、概念は有効でないと判断する。生成した概念とほかの概念の関係を個々の概念ごとに検討し、結果図を作成する。そしてその関係図を簡潔に文章化したストーリーラインを作成する。今回分析を進めていく中で、16人目ですでに理論的飽和に達したと思われたが、念のためさらに2名分の分析を追加して行い改めて理論的飽和を確認した。

V 結果

1. 渡伯語から現在までの在伯期間の中で、いつ、どのような時に異文化不適応感を持ち、どのように異文化を受け入れて適応に至ったか、そのプロセスの検討と理論の生成を行う。

a. 概念表

分析の結果、8のカテゴリーと25の概念が生成された。カテゴリーと概念、その定義については表2に示す。なお<>はカテゴリー名、【 】は概念名である。本文中の調査協力者の語りは「 」で示した。本研究は調査協力者の在伯年数や年齢の幅が広いが、その中でも共通性がみられる理論の生成を目指した。

b. 全体のストーリーライン

<渡伯前の期待>により、人はみな【夢、希望、楽観的観測】を持つ。そしてみな同様に<異文化衝撃>を受ける。この時、異国で初めての経験、理解できない経験をするなかで不安と孤独感が

増幅する【不安と孤独感】を持つ群と、違うことが面白いと感じたり深く考え込まないようにしたりして安定を保つ【落ち込みなし】の群に分かれる。

【不安と孤独感】をもつ群は、≪異文化不適應≫状態になり、自分と他者との価値観の違いを感じ、【分かり合えなさ】を苦痛に思う。出来事や人とのかかわりの中で、【日本と異なる部分】を意識する。【言葉の壁】を感じ、言葉が理解できない自分に対してふがいなさや焦りを感じ、自己有用感が低下する。また生活環境や習慣の違いが【生活しにくさ】、ストレスにつながる。そして精神的な理由から身体的にも異常をきたす【身体化】を経験する。また自分も異文化での生活に苦勞を感じるが自分の【家族も苦悩する】。しかし≪適應への努力≫により徐々に異文化不適應状態から脱却をはかる。具体的には、個性や特技を活かしながら積極的に異文化のなかに溶け込む【積極的な努力】をする。現地の習慣や現地の人など【異文化に合わせた行動】をする。そして日本語環境、日本の文化などある程度【日本の環境の保持】をし続けることによって精神的安定を保つ。また自分の【考え方のコントロール】をすることでストレスや不安が軽減する。その他にも自分や他者の積極的な動きではなくて、自然の成り行きや物理的な変化【成り行き任せ】で事態が好転することもある。≪さまざまな支え≫の影響も大きい。【夫や妻の支え】があり、夫や妻が近くにくれたことで心の安定が得られる。自分の身近にいる【周囲の人の支え】のおかげで苦難の時を乗り越えることができる。そして精神面、生活面で【在伯日本人、日系人の支え】が、精神的、物質的に【日本の家族の支え】があって、異国の地で頑張ることができる。【宗教の支え】を心のよりどころにして、お祈りしたり悩みを話したりすることで安定を図る。

今回三つ観点で≪評価≫をする語りがあった。一つは日本と比べながらの【ブラジル社会、ブラジル人への評価】。二つ目は異文化に接してこそ日本の良さ、または日本の良くない部分が見えてくるため【日本を再評価】。そして三つ目は日系コミュニティ、日系人に対し、尊敬や疑問など多様な考えを持つ【日系コミュニティ、日系人への評価】である。≪異文化受容と異文化適應≫では、ここに【住み続ける理由】がみつかり、より定着しようとする意識が高まる。異文化を理解して、その文化に親しみ受け入れる【異文化受容】の段階にすすみ、やがてブラジル生活を楽しみ、自分がここで暮らす意味を自覚して人生の目標や生きがいを持つ【異文化適應】に至る。

c. 考察

≪渡伯前の期待≫：人はみな【夢、希望、楽観的観測】を持つ。今回の調査協力者たちの渡伯のきっかけは①国際結婚、②就労、③配偶者や家族の渡伯に同行（順不同）のいずれかであり、子どもの頃に親に連れられて渡伯をした2名を除いて「◇小さいころから外国に行きたいという夢をずっと持っていましたので。G」などそれぞれ夢や希望を描いて渡伯をしている。国際結婚や夫の就労に伴い渡伯をした人は「◆主人がいれば何とかかなと思って。E」楽観的な観測を持って渡伯する。

≪異文化衝撃≫：そして渡伯後に、みな等しくこれまでの生活や常識が通じなくて困惑する≪異文化衝撃≫を体験するが、この時【落ち込みなし】の群と【不安と孤独感】が生じる群に分かれた。

落ち込まなかった人の理由としては「◎そんな暇なかつたですよ。K」という言葉の通り、日常を送ることに精いっぱい感傷に浸る暇がなかったこと、また「◇好奇心旺盛で、そういう事を苦勞

表2. 概念表

「カテゴリー」	【概念】	定義
渡伯前の期待	1 夢、希望、楽観的観測	渡伯前、渡伯直後はみな、夢や希望、楽観的観測を持つ。
異文化衝撃	2 不安と孤独感	異国で初めての経験、理解できない経験をするなかで、不安と孤独感が増幅する。
	3 落ち込みなし	違うことが面白いと感じたり、深く考え込まないようにしたりして安定を保つ。
異文化不適応	4 分かり合えなさ	自分と他者との価値観の違いを感じ、分かり合えなさを苦痛に思う。
	5 日本と異なる部分	出来事や人とのかわりの中で、日本との違いを意識する。
	6 言葉の壁	言葉が理解できない自分に対してふがいなさや焦りを感じ、自己有用感が低下する。
	7 生活しにくさ	生活環境や習慣の違いが生活しにくさ、ストレスにつながる。
	8 家族も苦悩する	自分も異文化での生活に苦勞を感じるが、自分の家族も難しさを感じていた。
適応への努力	9 身体化	精神的な理由から身体的にも異常をきたす。
	10 積極的な努力	個性や特技を活かしながら積極的に異文化のなかに溶け込む努力をする。
	11 異文化に合わせた行動	現地の習慣や現地の人に合わせて行動する。
	12 日本的環境の保持	日本語環境、日本の文化をある程度保持し続けることによって精神的安定を保つ。
成り行き任せ	13 考え方のコントロール	自分の考え方をコントロールすることでストレスや不安が軽減する。
	14 成り行き任せ	自分の積極的な動きではなくて、自然の成り行きや物理的な変化で事態が好転する。
さまざまな支え	15 夫や妻の支え	夫や妻が近くに来てくれたことで心の安定が得られる。
	16 周囲の人の支え	自分の身近にいる人の存在のおかげで苦難の時を乗り越えることができる。
	17 在伯日本人、日系人の支え	在伯日本人や日系人から精神的サポートや生活面でのサポートを受けて安定する。
	18 宗教の支え	宗教を心のよりどころにして、お祈りしたり悩みを話したりすることで安定を図る。
	19 日本の家族の支え	日本の家族から精神的、物質的支えがあって、異国の地で頑張ることができる。
評価	20 ブラジル社会、ブラジル人への評価	日本と比べながらブラジル社会、ブラジル人の評価をする。
	21 日系コミュニティ、日系人への評価	日系コミュニティ、日系人に対し尊敬や疑問など多様な考えを持つ。
	22 日本を再評価	異文化に接して日本の良さ、または日本の良くない部分が見えてくる。
異文化受容と	23 住み続ける理由	ここに住み続ける理由が見つかる、より定着しようとする意識が高まる。
	24 異文化受容	異文化を理解して、その文化に親しみ受け入れる。
異文化適応	25 異文化適応	ブラジル生活を楽しみ、自分がここで暮らす意味を自覚して人生の目標や生きがいを持つ。

と思わないでちょっと面白がりG」などその人の‘心の持ちよう’が関わっていたとも思われた。その他にも「◆ブラジルの生活と言うよりは、結局本当に日本みたいなもんだったんで。あの、ポルトガル語も結構みんな、日本語もしゃべれるからね（職場の）中は。L」職場では日本語で仕事できた、周囲に日系人や日本人が多く日本の暮らしとあまり変わらない暮らしができたなど、日本的環境が整っていたためブラジルにいながら日本人コミュニティまたは日系人コミュニティという保護膜の中で生活を営むことができた人は異文化衝撃もさほど大きくなかったと考えられる。しかし転勤や引っ越しにより生活環境が変化したり、頼りにしていた夫が思っていたほど自分の“守り”

にならないなど期待に反する現実に直面したりすると彼らも【不安と孤独感】の群に移行した。ただし渡伯時の記憶は、調査協力者の現在の生活満足度などによって再編成されていると考えられ「◎つらい思いとかそういうあれはあまり…心に残ってないんじゃないかと思いますけどね。ほくもそりゃ色々苦労してきましたよ。Q」と、過去の落ち込みを体験した事は憶えているが、その時の感情やエピソードなどは過去の出来事として消化され、意識の上には多くは残っていないと思われた。もしくは何らかの事情により、意識的に思いださないようにしているか、今は語りたくないと感じていた可能性もある。【不安と孤独感】を持つ群は、「◆着いたばかりの時は、日本にもう常に帰りたい。こう、飛行機を見れば、日本に帰りたい。B」とかなり精神的に追い詰められた様子も語られた。その不安に駆りたてられた時期や持続期間は人によって違う。渡伯直後の一定期間、数か月後、ブラジル国内での転勤後、仕事や夫婦関係で悩んだ数年間、などさまざまであった。仕事や夫婦関係の悩みは日本で生活していてもありうる。ただ彼らは「◆日本にいた時はすごい(夫婦仲が)うまいってたんですけど、ブラジルに来た途端ちょっとうまくいなくなってしまう。E」[◇(商売で)ブラジル式の裏をかく方法があるわ、いろいろ。インチキ。そういう事を平気でやる。N]と、ブラジルだから問題が深刻化したととらえていた。

〈異文化不適応〉：ブラジル人家族と同居すると「◆すべてが日本と違うし、食べ物、水、言語、あの考え方、いろいろ違ったD」と、自分がこれまで常識としてきた行動や考えが理解されず【分かり合えなさ】にストレスを感じる。渡伯後50年以上経過したある調査協力者は「『お母さん、もう今は仕様がなよ、周りがこんな風だから』って(娘は言うけど)…(あやすときに)赤ちゃんゆするから。…私は(ゆすっちゃいけないと)言いたいんですけどね(笑)。K」と、日本流の子育て観を持たない自分の日系二世の娘に【分かり合えなさ】を感じていると思われた。【日本と異なる部分】では「◆(ハグや握手の)機会が多いし、やっていくうちにやっぱりそういう方がいいかなと思って。L」など良い面として日本と異なる部分を語られることもあったが「◆車の免許を取るときも…全部違うんですよ。ハンドルの位置から、ワイパー、全部逆なんです。D」[◆こっちの人ってすぐ顔に出したり、はっきり言ったりとかするじゃないですか。B]など異なることへのなじめなさも多く語られた。ブラジルは地球上で日本の真裏、南半球に位置しているの南風が寒くて北向きの部屋が温かい。四季も日本と反対である。このように体感レベルで認知している部分まで“全部逆”で、“裏”が“表”で“正”が“誤”になるような生態的混乱もおこしかねないと推察する。【日本と異なる部分】については在伯年数が少ない10年以下の方たちから多く語られた。在伯年数が長い方たちは、違いをすでに当たり前のこととして受け取っているため違和感として語ることはなく、両国の異なる部分を“評価する”形で語っていると思われた。【言葉の壁】についてはほぼ全員の人から語られた。「◆やっぱり一番言葉ですよ。お店に行って聞いても通じない。B」在伯数十年が経ち、日常生活では困らないくらい会話ができたとしても「◇表面的な話。ここまでしかできない。F」より感情の込み入った深い話がポルトガル語ではできなくてあきらめ感を持つ

ていたりする。渡伯後50年を超えブラジルで就労した人でも「◎言葉での苦勞と言うのは、やっぱりありますよ。残念ながら。O」今では自分の娘や息子たちのポルトガル語の会話にもついていけないと語られた。日本とブラジルの生活環境の違いで大きなものに治安の悪さがある。「◆あそこにまた泥棒が入ったとか、なんか車が突っ込んだとか本当にこう…よけい神経がピリピリして。C」「◇子どもたちが小さかったでしょ。誘拐…それから強盗。そういう心配がずっとあった。N」犯罪に遭遇する確率が日本よりずっと高いだけに、身を守らなければいけない防犯上のルールがブラジルにはいくつもあると思われる。そういった意味での【生活しにくさ】のほかにも「◇あのころはなんでも不便でしたね。いいものあんまりなくて。郵便事情も悪いし。電話もまだなくて。I」と20年以上前に渡伯した方たちは生活自体の不便さから生活しにくさを感じていた。そしてその頃は現在ほど犯罪も多くなって防犯や交通マナーの悪さによる生活のしにくさは語られなかった。渡伯後10年以内の方たちは若干生活の不便さは感じているかもしれないが、今は日本食の入手状況や通信事情が以前と比べると格段に良くなってきており、やはり生活のしにくさとしては治安の悪さが多く語られるという年代の差が見られた。《異文化不適応》により精神的に追い詰められて【身体化】も起きる。「◆いろんな元々自分の持っているアレルギーとか、なんかそういう原因とかわからないもの、病気とかが一時的にわっと出ました。D」精神的に負担が大きくなると神経症状の一つとして身体に異常をきたし、それによりさらに苦痛や焦りを感じるようになる。また自分だけでなく、一緒に連れてきた自分の子どもたちや同居したブラジル人【家族も苦悩する】。「◆姑もまた悩んだみたいで。どうにかうまく行ってほしいんだけど、言葉が通じない、ご飯が違う。B」「◆今考えると、下の子はちょっとヒステリーっぽい感じ?C」そしてそれを見て申し訳なさを感じる。その反対に適応する子どもたちを見て自分だけ取り残され焦りを感じたという語りもあった。

《適応への努力》：それでも《適応への努力》によって徐々に不適応状態から脱していく。【積極的な努力】については「◎夜間中学に行ってね、…勉強しましたよ。…死にもの狂いですよ。O」「◇同じアパートにブラジル人の未亡人が多かったんですよ。積極的にブラジル人の中にも入っていきました。G」など、ブラジル社会に入るための具体的な行動や心得が語られた。また家族同士で分かり合えなさや言葉の壁を感じた時は「◆『ちょっと、パソコンで話しよう』って。お互いパソコン並べて自動翻訳機で、うちの主人と。A」母国語が異なるパートナーの場合、細かな言葉のニュアンスで誤解をして関係を亀裂が生じたりする。そんな時にパソコンの自動翻訳機を介して共通言語の英語でやり取りをすることで積極的に分かり合おうとするという努力が語られた。また【異文化に合わせた行動】をとることは現地の人と円満に共存するために必要な心配りと思われる。「◆ごま油とか、嫌いな人もいたので、やっぱり自粛して作らないようにしていました。D」【異文化に合わせた行動】は自分を守るためにも必要である。「◆外を歩いているときは、かなり気を張っていますね。…格好もTシャツとGパンとかで、あんまり日本人っぽくは見られてないと思うんですけど。A」「◆（ブラジル人は）すごい強いですね。もう言ったもの勝ちにして言わないとどん

どん消されて行ってしまう。D」これらの行動はブラジル社会で生きていくために必要不可欠の事と考えられる。《異文化衝撃》の折に【落ち込みなし】の要因として、‘心の持ちよう’があることは少し触れた。やはり日本の常識や考え方に執着したり、物事をネガティブにとらえてしまったりすると異文化への適応は難しい。「◎自分をコントロールすることが大事になってきますね。…人生、運不運もあるしね。O」「◇受け入れようっていう思いを基本的に持っていないとダメだと思う。ここでやっていくの。R」このように【考え方のコントロール】をして自身の立場を特別不幸と思わないで前向きに考えることがストレスや不安の軽減につながると思われる。そして日々の生活の中で【日本の環境の保持】ができると心的な安定が保たれると推察される。「◆毎日だいたい（日本語を）しゃべっています。A」「◆日本人とのつながりが大きいと思いますね。…日本語がまあ、通じるっていうのがやっぱり大きいですね。L」不慣れなポルトガル語を使うときは考えながら話さないといけない。さらに相手に言いたいことが正しく伝わっているだろうかと常に気になるなど一種の緊張状態が続く。そんな生活のなかでは、一時でも日本語を話すことができるということが故郷に帰る感覚にも似たほっとする時間だと推察する。そこで癒され現実生活への英気を養うことができると考えられる。また日本に一時帰国した人からは、「◇もうすぐ落ち着きましたね。それで（ブラジルに戻ってから）どんどんこちらに定着していったF」という体験も語られた。

《成り行き任せ》：中には自分で積極的な動きを起こさずに【成り行き任せ】でも事態が好転した例もある。「◆もう時間。時間に任せるしかなかったんです。D」「◎私の場合、本当に全て成り行きでしたから（笑）。そうなんです。K」成り行きに任せていたらいいタイミングで人の助けがあった、出来事があったという意味で語られている。苦境の時にこのように達観する心のゆとりがあったから良かったとも考えられる。

《さまざまな支え》：今回の調査協力者はすべて、それぞれ重要な他者と関わり合って《さまざまな支え》を経験している。その支えの一つは【夫や妻の支え】。結婚相手がブラジル人だった場合は、ブラジル社会への橋渡し役割または異文化衝撃を直接受けなくて済むような“クッション”の役目を果たすことが多いと推察する。「◆主人が普段その、一週間以外は家にいる仕事なので、本当に助かっているんですね。A」言葉が不自由で異国での生活に不慣れな期間は買い物に付き添ってもらうなど相手に守られながらブラジル社会に慣れていくことができると考える。その他に日本人同士の夫婦でも相手に支えられたと感じ、感謝の気持ちが語られることが多かった。「◎家内が…とってもいい人だったから。僕を助けて一生懸命に協力してくれて。P」「◎うちの家内が一度も泣き言を言ったことがないから。同じレベルでケンカできるし、話もできるでしょ。それは大事なことだと思う。O」ポルトガル語も日本語も両方理解できる【在伯日本人、日系人の支え】も大きな支えになったと思われる。「◇彼女はあの、二世の人で、（ポルトガル語と日本語）両方話して、親代わりみたいな気持ちで接してくださったので、大変助かりました。G」通訳など生活の上での

サポート役を担ってもらっていたという語りや「◆なんか本当にブラジルにもお母さんがいるような。それがありませんね。A」と、家族役割をしてもらえて心の支えになったと思われる語りもあった。同じく【周囲の支え】として「◆子どもの存在はすごい大きいし。なんか子どもがいたから生きて来られたかな。E」と子どもが心の支えになったり「◇お手伝いさんがいたんですけど、最初からずーっと。…日本語は理解しないけど…私が買い物できなくてもみんなお手伝いさんが全部やってくれて。F」自分の身の回りの人が生活面でサポートをしてくれると心にもゆとりが生まれると考えられる。その他に【日本の家族の支え】の精神的なサポートは大きいと思われる。「◎手紙はいつもね。母がいつも手紙くれました。K」「◇出産するときは（両親）二人で来てホテルで泊まって…一週間くらいいてくれましたね。I」対極例として「◆親とか、日本のあの、家族にも全然頼れないし、頼りたくなかったというのもある、すごい、すごい孤独っていうか。E」という語りがある。このように日本の家族に頼れないと孤独感を感じ、反対に日本の家族が定期的に手紙や小包を送ってくれたり困った時に駆けつけてくれたりすると、支えを感じて安定につながると推察される。

【宗教の支え】も多く語られた。「◇神様の応援というか、後押しがいつもあったね。R」「◎信仰があったというか。これは神様の試練だなと思いましたね。そういうこともあって、乗り越えられたということもありますね。K」調査協力者Kは渡伯時の困難さを尋ねても「なんでも面白がりました。」と答え、当初は困難な事は何もないと語っていた。しかしインタビューが進む中でやがて「試練があった」と語りはじめた。「乗り越えてきたもの」については具体的には語られなかったが、インタビューが進む中でKは自分の人生の振り返りが深まり、今ここでこうしていることの意味を最終的に、このように結論付けたと考える。

《評価》：《評価》をするということは‘その対象’について関心があり、自分であれこれ考えた末に‘自分なりの考え’を持つからこそできると考える。日本を離れて異文化に接し、日本を改めて見直すことで【日本を再評価】する。「◇（日本には）価値ある文化…習慣がすごくたくさんあるんだなと思いましたね。こっちに来てから。N」そして日本と比較しながら【ブラジル社会、ブラジル人への評価】をする。その語りの内容は「◆時間を待ち合わせても、まあ時間通りに来ないでしょ。L」というマイナス面も語られたが「◎ブラジルのいいところは、やっぱり多様性ね。みんながみんなで受け入れてそいで自己主張もしながら、共生している。J」「◇ブラジルって、自由。自分の人生は自分で。M」というプラスの面の方がより多く語られた。ブラジルを永住の地として異文化受容や適応に至った人々だから、今このように良い面に着目することができるのかもしれない。

《異文化受容と異文化適応》：異文化での生活が長くなると、やがて彼らは日本人ではあるけれどブラジルが“自分の住む国”と考えるようになる。【住み続ける理由】としては友人知人、家族のつながりや、自分の家などの財産が日本ではなくブラジル国内で増えてくることであったり、単純にブラジルの方が良いと思う理由が見つかったりしたためと思われる。「◆こっちの方が自分らしく

いられるかな。C」「◎V県をあそこで帰って百姓をやりたくない(笑)。O」理由は人によって違うがブラジルの方が住む国として好ましいと感じるようになると【異文化受容】が促進されると思われる。「◇その人たちはこういう歴史があって、こういう物の見方だからそうなんだと、それを受け入れる。H」ことができるようになり納得して異文化を受け入れる。そして「◎ブラジルでもう骨をうずめるつもり。P」と考えるようになる。【異文化受容】が進むとやがて異文化が自文化に置きかえられると思われる。「◇僕の体は、半分日本の文化とブラジルの文化、半分です。M」「◎日本人じゃなくてブラジル人ですね。こんな長く住んでいるから。Q」すでに自分はブラジル人、または半分ブラジル人という認識を持つ。そして「◎私個展の勉強をしてるね。…私がやっている折り紙のテーマは、折り紙を生んだ日本文化っていうのにして。J」という語りのようにブラジル生活を楽しみながら自分の生きがいに生きようとする【異文化適応】段階に進むと考えられる。本研究における【異文化受容】とは「納得し、受け入れる」という受身的立場である。それに対して【異文化適応】では「ブラジル生活を楽しみながら自分の生きがいに生きる」など、能動的な立場も加わり、より高次の段階と区別して考えた。Adler (1975) の自立期(適応)の定義に「個々の異文化での存在の意義を見出すことが出来る」という箇所がある。本研究でも日本人として異国の地に住むことの意味を自身に問い直す作業をする人が見られた。異文化受容、適応のプロセスは人により進度が違うと思われる。在伯数十年の日本人夫婦(G, N)に各々インタビューした折、妻は「◇日本にはもう適応できません。…自然にここに住んでいるというか。G」と語り、日本語を教えたりブラジルの郷土音楽を趣味として学んだり積極的に社会に出て活動しており、ブラジル生活に十分適応していると思われた。一方夫は「◇いろんなありとあらゆるものを見てしまった。見なくてもいいものを見ちゃった。だからブラジル嫌いになったんだ。N」ブラジル人の中にいると疲れるなどマイナス面を多く語り、日本に帰りたいと語っていた。このようにともに人生を歩んだ夫婦であっても一方は適応を示し、他方はおよそ適応しているとは思われないケースもあった。

本研究では、一人平均29.3年、最長86年の渡伯後の人生を語っていただいた。渡伯後10年未満とそれ以上の方で比べてみると、渡伯後の異文化衝撃については10年未満の方からより具体的に語られる傾向があった。20～40年経過した方でも具体的に語られることはあったが50年を超えるとエピソードがやや抽象的となり、その時どんな思いであったかその感情部分や、印象深かったことのみが語られる特徴があった。いつ異文化不適応感を持ったかについて検討したところ、語りの中で渡伯後間もないころについての語りは明らかに異文化衝撃と考えられたが、渡伯後何十年か経過したのちの出来事による「衝撃」は異文化不適応のみに起因するとは考えにくかった。家族間の問題や仕事上の問題など日本に居住していても起こる可能性がある原因も絡み合っており、どちらの要因がより影響を与えているのか判断し兼ねた。

また本研究で渡伯した日本人が「異文化」として語られたものは、ブラジル文化と日系人の文化と二種類存在した。これについては【日系コミュニティ、日系人への評価】と合わせて次に述べる。

2. 日系コミュニティや日系人の存在は、渡伯した日本人の異文化適応の過程に影響を与えたかどうかを検討する。

結論から述べると、日系コミュニティと日系人は渡伯した日本人が安定的かつ徐々にブラジルに馴染んでいくため、大変有用な存在と考えられる。今回の調査協力者たちの語りからも日系コミュニティ、日系人と関わることで精神的な安定が得られブラジル社会に馴染んでいった様子を伺うことができ、これらの存在の影響は大であると思われる。しかしその反面、「日系人たちの日本文化」は日本人から見ると「日本人の文化」から派生しブラジルの地で発展した異なる文化で、ここで異文化衝撃を受けることもあった。「日系人」も「日本人」と同じ人種ではあるが“全く同じ”ではないと感じていた。「◇ブラジルとしての異文化じゃなくて、日本として、日本人としての異文化を感じた。日本にいる日本人と、ブラジルにいる日本人。H」「◆日系の人違って言うのはやっぱり話、日本語は話せるけど、何て言うか日本人同士と話すのとまた違うじゃないですか。C」日本からきた日本人にとっては、日系人は確かに日本の文化を伝えようとしていると理解できるが“日本の文化と全く同じ”ではないと感じていると思われる。それでも「◇日系人2世、3世として生まれて育てきて、その過程で例えばブラジル人に騙されたりとか、あの、彼らなりの歴史があってそう言っていたり自分たちがブラジル人の血を混ぜたくないって思ったりするような事をだんだんわかってR」くるなど、どのような過程があって日系人の今があるのか理解が深まると【日系コミュニティ、日系人への評価】も日本人と違う部分を納得し、評価が高まる。そして自分の中に取り入れるもの距離を置くものを自ら選択して、日系人の文化という異文化を受容し、やがて適応に至る。

3. 総合考察

a. 先行研究との比較

「異文化適応は静的なものではなく“過程”であるため絶えず変化していく心理的な状態である(高井,1989)。」そのプロセスに関する古典的な研究として Lysgaard (1955) によって提唱されたU-カーブ理論と Gullahorn & Gullahorn (1963) によって提唱されたW-カーブ理論がある。前者は滞在地での異文化の適応の過程をU字曲線で表わし、後者は帰国後の自文化での再適応曲線のU字曲線と合わせて全行程の適応曲線をW字曲線で表わして、説明している。また Oberg (1960) は異文化適応の過程を「蜜月期」「敵対期」「回復期」「適応期」の4つの段階に分けている。彼はカルチャーショックという言葉を使い、適応の過程を強調して特に個人の心理的影響を追及した。Adler (1975) は適応段階を、「異文化接触期 (contact)」「崩壊期 (disintegration)」「再統合期 (reintegration)」「自律期 (Autonomy)」「自立期 (Independence)」の5つの段階 (phase) に分けて示し、認知、感情、行動のそれぞれの面からその心理過程を解釈している。最初の段階「異文化接触期」は、自文化によって異文化から隔離され守られていると感じ、文化的差異に興味をそそられる。相違点は類似点と同じように自分の地位、役割、アイデンティティを保持するために合理化されるとしている。本研究では渡伯前の期待の時期も含まれているが【夢・希望・楽観的観測】がほぼこれにあたると思

われる。第二段階の「崩壊期」では混乱や孤独感、無力感から自信をなくし、第三段階の「再統合期」は依然として怒り、異文化の拒絶などが見られるがこの否定的な行動は自己主張と自尊心の成長によるものとしている。本研究ではこの時期を「異文化不適応」とひとくくりにしている。そして「再統合期」で葛藤する期間に「適応への努力」「成り行き任せ」などの態度や「さまざまに支え」が適応過程に影響するとした。4番目の段階「自律期」は文化の共通点と相違点をありのままに受け入れることができ、現地の人に共感し、自信を持って行動できる時期とされており、文化の相違点をプラスと捉え、自らの行動を選択し、責任を果たせるとしている。本研究の【異文化受容】は異文化を理解してその文化に親しみ受け入れると定義しており、この期に匹敵すると考える。また自分が“現在の自分である”ことの意味を作り出すことが出来る5番目の段階「自立期」は本研究では、ブラジル生活を楽しみここで暮らすことの意味を自覚して人生の目標や生きがいを持つと定義した【異文化適応】にあたりと推察する。このように本研究での異文化適応へのプロセスは、不適応状態をひとまとめにしていることと、適応過程に影響を与えるものについて詳しく示しているという違いはあるもののAdlerの提唱した適応段階とはほぼ一致していると思われる。彼の研究では何がトリガーとなってそれぞれの段階が生じるかについては言及されていないが、本研究では異文化不適応から異文化受容に至る過程で影響するものについて示している点で新しい知見であると考えられる。だがAdler同様本研究でも各段階の連続性の有無はわからなかった。Berry (1997) は移

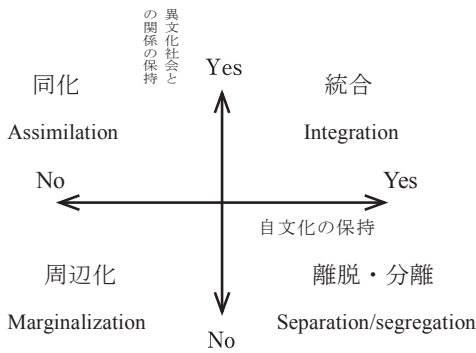


図2：文化変容方略
Acculturation strategies

民集団の実証研究から“文化変容態度”（異文化適応に向けての態度）の概念分析を行っている。その中で、個人は一定の相違を経験して自己調整のための心的過程を経験するとして文化変容（異文化適応）に関わる問題の出所は文化的ではなく、文化間で生じた問題だと述べている。そして文化変容態度研究における二次元モデル（図2）を示した。このモデルはまず二つの問い①自分の文化的アイデンティティと特徴を維持したいか。②移民（移住）先の社会と良い関係を維持したいか。について「はい」か「いいえ」で答えてもらい4類型に分ける。①、②の問

いとも「はい」なら「統合」(integration)：固有の文化も維持し、移住先の社会とも交流する。①が「いいえ」②が「はい」なら「同化」(assimilation)：固有の文化的アイデンティティの維持を望まず、日々の生活で移住先との交流を望む。①が「はい」②が「いいえ」なら「分離」(separation)：自分たちの母文化を維持しながら同時に移住先との交流を回避すること。①、②とも「いいえ」なら「周辺化」(Marginalization)：固有の文化を維持することに消極的かつ移住先との交流にも関心が乏しい状態とみなされる。このように当てはまり度合いに高低の二区分を設けて二次元の組み合

わせをもって4類型を設定する。そしてBerryは、このなかで「統合」の志向性が心理的な適応の高さと結びつくとして述べている。彼の研究は難民、短期滞在者のほか長期に滞在する移民など多様なサンプルを扱っている点、価値観などの認知や個人の意識に重点を置いている点で本研究と共通すると思われる。

桑山 (1996) は風景構成法の描画を通して、外国から花嫁移民した女性の日本への適応不適応モデルを示した。不適応を起こした二事例の女性についてBerryの二次元モデルを引用して説明すると一人は全て日本の風景を描き、日本に過剰に適応しようとしたとみられる「同化」型。もう一人は何年経っても母国の風景を描き、日本に馴染むことに拒否的だったとみられる「分離」型であった。一方良い適応を果たしている女性の場合、風景構成画のなかに遠景から日本のものが取り入れられ、徐々に母国の風景と入れ替わっていた。桑山 (1996) は「安易に早く日本社会へ同一化しない方がより健全であるといえるように思われ」「変われるところから穏やかに段階を踏んで変わる、あるいは取り込むことこそ移民が異国の地に適応していく上での『安定した』適応ステップではないだろうか。」と述べている。本研究では二人の調査協力者が学童期に親とともに渡伯している。(P : 7歳) (Q : 11歳) 彼らの人生は両親や渡伯した時代背景や移住先の環境に左右されており、渡伯後半世紀以上経ったいま、彼らの異文化適応の度合いに差が生じている。Pは渡伯直後から奥地の日系コミュニティの中で、日本語で日本の教育を受けて育った。やがて日本人女性と結婚してその後の人生も日系コミュニティと深く関わりながら生活している。83年経った今でも妻も自分もポルトガル語が苦手で友達はほとんど日本語のわかる日系人と語り、このままブラジルで生活することについて「仕方がない」と語っている。一方Qは渡伯直後から日系コミュニティと適度に付き合っただけで育つが、現地の子どもたちと同じブラジルの学校に通いポルトガル語は苦勞せず習得した。そして現在日系人の妻と日常ポルトガル語で会話し、日系人、ブラジル人両方ともつき合っただけで自分のことを「ブラジル人です」と言う。そして住むなら日本よりブラジルがいいと語っている。二次元モデルで分類するならばPは「分離」Qは「統合」タイプと思われる。Pのように日本人同士のつながりの中で生活したら、異文化衝撃も少なく安定して暮らすことができただろうがブラジル社会への融合はかえって阻害されたと考えられる。本研究の表2.カテゴリー、概念表でみると「適応の努力」カテゴリーにおける【異文化に合わせた行動】【積極的な努力】が「移住先の社会との関係を良好にしたい」と言う意思を、【日本の環境の保持】が「自分の文化的アイデンティティと特徴を維持したい」という意思を示していると考えられる。「統合」タイプの人々が心理的な適応が高いのであれば、【異文化に合わせた行動】【積極的な努力】と【日本の環境の保持】の両方の概念を持つことが好ましいと考えられ【考え方のコントロール】をして固有の文化を保持し、早く馴染もうと焦らないでバランスよく居住する国にも関わっていくことが、安定的に適応が進むポイントと思われる。

b. 日本と西洋の文化差と個人差

河合 (1999) は日本と西洋の文化差の判断軸として父性—母性という軸と、内向—外向という軸

の二つによって整理するのが便利であると述べている。「父性」は子どもを良い子と悪い子などと分割し、その強い切断力によって子どもを厳しく鍛えてゆくもので西洋の個人主義はこのような厳しい鍛錬を経て作り出された。一方「母性」はすべてを良きにつけ悪きにつけ包み込んでしまいすべての子どもを没个性的に平等化してしまう。日本人はこの母性原理が強いと河合は考える。「内向」とは、例えば何か悪いことがあるとその原因を内に向けて、自分や内的条件に方向づけること。「外向」はその反対にその原因を他人や外的条件に目を向けることである。そしてこれにより全く対照的に位置する国同士は異なるものを感じる強い反発と魅力を感じると述べ、日本との対照例としてアメリカを挙げている(図3)。ブラジルは大陸が広く移民の多い比較的若い国である。アメリカ

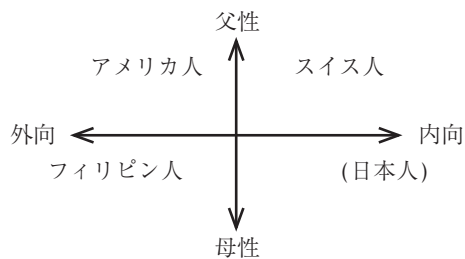


図3:父性—母性の国民性(河合:1999)

と同じく父性、外向の国に分類されると仮定すると日本人がブラジル文化に接したとき強い反発と魅力を感じると推察する。Berry (1997) も「渡航者の出身地の社会的文脈特性と、留学(移住)先の社会的文脈特性を無視する研究は、個々の適応過程を十分に理解することはできない」と述べており、異文化適応研究には、出自と移住先の国との社会的文脈特性の親和性についての観点を欠かすことが

できないだろう。また、河合(1999)は「ある個人が自分の故国を離れてほかの国に移住してゆくとき、自分の個性により適合した国を選ぶ傾向があるように感じた」とも述べており、日本人がブラジルに移住したとき一般的に強い衝撃を受けやすいと考えられるが、人によってその度合いが違ふと予想される。そして異文化適応プロセスを研究するにあたって移住者の個性をふまえることも必要と考えられる。本研究では先に述べた在伯数十年の夫婦(G,N)が異文化受容と適応の進度が違い、(出身地ではなく)個々の個性が影響したケースと思われる。

c. 日本人の特性と日系コミュニティ

ブラジルの日系コミュニティでは現在も日本語で会話を楽しむ日系人たちが多数みられる。そして日本の食生活や七夕、折り紙、生け花など伝統的な習慣や文化を伝承し、時には日本祭りを開催して日本の伝統の発信地としての役割も果たしている。Z市の写真集(Jose,2009)にこの街に住む移民たちの民族紹介の頁があるが、日本人移民については「…親切で穏やか、そして伝統的に集合している」と記してある。これは日系人の結束力はブラジル人も認める場所であることを示していると思われる。なぜ日系コミュニティが100年以上も結束し続けているのか。日系コミュニティ、日系人について考察することは渡伯した日本人に与える影響を検討するうえで必要であると考えられる。

・日本人の海外における行動パターン

稲村(1980)は海外における日本人の行動パターンとして顕著なものに①固まること②優等生的振る舞い③教育熱心④独特のスケープゴード(いけにえ、非難の対象)づくりという4つの特徴が

あると指摘している。長期滞在者や旅行者も含めて日本人はとかく海外では日本人同士固まり他の人種と交わることに消極的になりがちになる。稲村は、固まることが特に日本人に限定したことでなく他の人種、中国人やユダヤ人、白人でも固まって住む傾向がみられるとしながら、それでも日本人のそれは特徴的であるとしている。河合（1967）は、東洋人は西洋人と比べて「自と他の境界もあいまい」で「意識の構造が自己に向かって開かれている場合、無限の広がりを持った自己は深いところで自と他の区別なく重なり合うことになり、ここに『個』を無視した強烈な連帯感が発生」と述べている。日本人の自他の境界のあいまいさが、他を他と意識しないで寄り添い固まることに対して違和感を持ちにくくさせているのかもしれない。そしてこの固まりやすさが日系コミュニティの結束力と関係があると考えられる。②優等生的振る舞い③教育熱心については本研究では論旨からそれるため割愛する。④スケープゴードづくりについては、本研究においても複数の調査協力者から語られた。日系コミュニティでは往々にして、子女に対し日系人以外の人との婚姻を許さず、禁を破ったものは勘当するなどいわば村八分という制裁措置が課されるという。現在はブラジル人との結婚が珍しくなくなりブラジル文化との融合が進んでいるように見受けられるが、いまだに奥地の日系コミュニティは「固まって」おり、日本人同士の「見張り合い」は厳しいという語りがあった。そしてそれについて批判的な言葉が少なからず出されたが、そうになってしまう訳も理解できるという語りもあった。このように納得すると異文化である日系人の文化にも馴染むことができるようになると思われる。

VI 今後の課題と展望

本研究においてプロセスそのものに関しての新しい知見は得られなかったが、在伯日本人の異文化適応プロセスに一定の流れがあることが考察され、AdlerやBerryらの研究結果と同様のことが本研究でも示唆された。

今回の調査では、永住目的で居住する在伯日本人という条件で対象を選定した。そのためそれ以外の条件である年齢や渡伯した時期、在伯年数の幅が広く、時代背景や渡伯理由などにかなり個性がみられた。今後は渡伯の目的や渡伯した時代を限定するなど調査対象の絞り込みを行い異文化適応プロセスに関わる個人的背景や社会的背景の影響を検討することが求められる。またブラジル以外の日系人コミュニティが存在する国や、日本人がほとんどいない国でのケース研究を行い滞在国の社会的環境、日本の環境の影響を比較検討することによって新たな理論や臨床心理的援助方法が見いだされる可能性があると思われる。

本研究は日本人の異文化適応研究ではあるが、得られた知見から日本に滞在する外国人の異文化適応研究につなげる方向性もある。また東日本大震災後、多くの被災者たちが避難民として故郷を離れて他の土地に住むことを余儀なくされている。この避難民の方たちの支援報告のなかで成井（2012）は、慣れない環境の中で一緒に住めない家族を恋しがって子どもが新しい環境に適応しにくい心的状況であったり、母親が親しい隣人もなく孤立感を深め不安定になったりしている状況も

あることを報告している。「移民」と「避難民」は置かれた状況や移住のきっかけこそ相違があるが、住み慣れた土地を離れることと移転先で起きうる問題など共通点もある。したがって「避難民」の避難先での適応に関わる心理的援助、その他国内転勤家族にも同様に援用できる可能性がある。

また今回の調査では調査協力者に長い自分の人生を語っていただいた。その一人一人に対してケース研究をしてもきっと興味深い知見を得られたと考える。今回は彼らが詳しく語ろうとしない「過去」についてはあえて触れなかった。しかしながら被調査者がしみじみと過去を語る様子は自身で過去の出来事を回想し洞察を深め、無意識のうちにその過去に区切りをつけるなど心の作業が行われているように感じられた。約一時間の調査の中で筆者が質問し、被調査者はそれにこたえて語ろうとする中で内容がいつそう深まっていった様にも思われる。今後は「『対話』『相互行為』『生成プロセス』など語り行為や語りの変化がより強調される」(やまだ、2007) ナラティブ研究の手法を取り入れることで異文化適応における個々の心的過程に焦点を当てた研究ができると考えられる。

付記

本論文を作成するにあたり、ご指導いただきました愛知教育大学大学院、三谷聖也先生をはじめ学校教育臨床専攻の諸先生方に厚く御礼申し上げます。またご多忙の中、本調査に協力して下さり貴重なお話をしていただいた皆様には心から感謝いたします。

VIII 引用文献

- Adler, P. S. (1975) . *The transitional experience : An alternative view of culture shock*. Journal of Humanistic Psychology 13-23
- Berry, J.W. (1997) . *Immigration, Acculturation, and Adaptation*. *Applied Psychology : An International Review* 46 (1) 5-68
- ブラジル日本移民史料館 (編) (2008) *目で見るブラジル日本移民の百年* 風響社12,124
- Erikson,E.H. (1973) : *自我同一性 : アイデンティティとライフサイクル* 小此木啓吾訳編
- 外務省領事局政策課 (2012) . 海外在留邦人数調査統計 : 平成24年度速報版 (2011,10,1 現在)
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/12/pdfs/WebPrint.pdf> (2012,12,9 取得)
- 外務省在Z市総領事、萩生田浩次 (2006) . 総領事館ほっとライン - 32回Z市日系人も創造に貢献したエコシティー- <http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/iken/06/souryouji/32.html> top (2012,12,9 取得)
- Gullahorn, J.T & Gullahorn,H.E. (1963) . *An Extension of the U-Curve Hypothesis*. Journal of Social Issue.19 (3) 33-47
- 原裕視 (1995) . *異文化接触とアイデンティティ* 異文化間教育 9号 国際文献社 4-18
- 稲村博 (1980) . *日本人の海外不適應* 日本放送出版協会138-160
- Jose,P.F. (2009) . *CURITIBA* Natugraf 80

- 河合隼雄 (1999) . *中空構造日本の深層* 中公文庫 22,244-258
- 河合隼雄 (1967) . *ユング心理学入門* 培風館 274-283
- 木下康仁 (2007) . *修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法* 富山大学看護学会誌 第6巻2号 1-10
- 桑山紀彦 (1996) . *移民と風景構成法* 山中康裕編著 風景構成法その後の発展 (pp.219-235) . 岩崎学術出版社
- 李正姫・田中共子 (2011) . *海外移民の文化変容態度と文化的アイデンティティ研究に見る在日コリアン研究への示唆 (1)* : 岡山学院大学院社会文化科学研究科紀要 第32号123-137
- Lysgaard,S. (1955) . *Adjustment in a Foreign Society : Norwegian Fullbright Grantees Visiting the United States*. International Social Science Bulletin, VII、45-51
- 成井香苗 (2012) . *避難生活と家族への心理的援助* 家族心理学年報30 日本家族心理学学会 45-57
- Nobuko,O・Masashi,M (2007) . *Japanese Mothers Living in New York with Young Children : Transcultural and Child Rearing Stress Factors and Mental Health*. J Jp Soc Psychosom Obstet Gynecol Vol.12 No,3 506-518
- Oberg,K (1960) . *Culture shock : Adjustments to new cultural environments*. Practical Anthropology 178-182
- 鈴木満 (2012) . *異国でこころを病んだとき* 弘文堂 9-10
- 高宮静男・植本雅治・針谷秀和・鶴川晃・清田直俊・佐藤倫明 (2006) . *多文化間心身医学とは -心身相関の医学より一歩先へ-* 心身医学7月・第46巻 第7号 661-666
- 竹下修子 (2001) . *台湾における日本人妻の社会的ネットワーク* . 愛知学院大学教養部紀要49巻第2号 87-99
- 詫摩武俊 (1981) . *適応* 下中邦彦編 心理学事典 平凡社 604
- 田中共子 (2005) . *異文化ストレス (特別企画 : 臨床心理学と社会心理学)* ストレス科学19 (4) 230-236
- 高井次郎 (1989) . *在日外国人留学生の適応研究の総括* 名古屋大学大学院教育学研究科紀要 Vol.36, 139-147
- やまだようこ (2000) . *人生を語ることの意味 -なぜライフストーリー研究か? -* 教育心理学年報 第39報 146-161
- やまだようこ (2007) . *質的心理学の方法* 新曜社57